

新島八重顕彰会の皆様、こんにちは。

会員の若林悠という者です。

私は風刺画研究を仕事にしているのですが、江戸で出された非常に面白い風刺浮世絵がありますので、岩澤さんに頼んで紹介させていただきます。

(来月出す本の宣伝です)

「明治三大絵師」の一人で「役者絵の国周」と称えられた豊原国周が、慶応四年(=明治一年)に描いた「善悪鬼人鏡」という44枚のシリーズがあります。

一見、普通の役者絵にしか見えないこのシリーズは、戊辰戦争の風刺画なのです。

幕末関係書は世に溢れていますが、すべては武士の行動を追ったものであり、圧倒的多数をしめる一般庶民が本当は何を考えていたのかは、現代人のほとんど誰も知らないでしょう。

庶民が武士の行動に口を挟むことは許されないので、彼らは文章では何も書かなかったからです。

ですが、文章の代わりに絵を使い、武士の知らない庶民専用の暗号を開発して、極めて具体的な政治批判を展開していました。

固有名詞は絶対に出しません。

代わりに登場人物の着物に家紋(定紋)や替紋や地方名産品などを描き、その人物が誰なのか、どの藩の話をしているのかを読み手に教えます。

そして、役者が演じている役柄と考え合わせれば、その藩についての江戸っ子の評価が分かるのです。

具体的な作品をご覧ください。これは会津藩です。



描いてあるのは人物一人、文字はタイトル「善悪鬼人鏡」と役名「佐島典覚（さしまてんがく）、あとは絵師名（国周）と彫師名だけです。

文字での紹介はありませんが、似顔絵が役者の中村芝翫（なかむらしかん）になっています。

たったこれだけで「佐島典覚＝会津藩」、そして会津藩に対する江戸っ子の評価が分かります。

以下は本からのコピーです。



佐島典覚とは「遠山桜天保日記」に登場する佐島天学という僧のことである。やってもいない短銃強盗の罪を真犯人に擦り付けられ投獄されるが、脱獄を果たして同心（警察官）になる。数年後、天学は牢破りを犯した罪人として再び捕縛される。しかし、名奉行・遠山金四郎（ドラマ「遠山の金さん」のモデル）によって天学が同心になった動機が冤罪への怒りであったことが認められ、天学の牢破りの罪は許され、強盗の真犯人も捕まる。

歌舞伎演目も時代によって内容が変化するが、明治二六（一八九三）年の台本によれば（幕末は不明）このような話であったらしい。

「佐島典覚」に見立てられているのは会津藩。佐島典覚の着物に描かれた花に注目しよう。カタカナの「ア」を丸く描いたものが集まって花びらを形成している。その周りを囲むのはカタカナの「イ」が集まったものだ。会津の「ア」「イ」である。江戸時代の「ア」や「イ」は現代と同じ形だから分かりやすい。



「幼童遊び子をとろ子をとる」部分。
錦葉ざの羽織を着た集団風刺画
の会津藩（国立国会図書館蔵）

本作の似顔絵は四代目・中村芝翫^{なむらしばん}になっている。現代人は浮世絵の人物はみんな同じような顔だと思ってしまうが、当時の人々はきちんと見分けた。しかし、大谷友右衛門の稲葉幸蔵と同様に、中村芝翫が佐島天字（佐島典寛）を演じたことは一度もない。それでも国周が佐島典寛役に中村芝翫を使っただけは、着物にもう一つの柄をできるだけ自然に描き込みたかったからだ。「ア」「イ」ではない方の柄は、中村芝翫の定紋「祇園守」に似せている。

祇園は京都最大の繁華街である。会津藩は尊王攘夷派のテロリズムが吹き荒れた京都で「京都守護職」の任務に就き、祇園を含む京都の人々を体張って守ってきた。だから「祇園守」なのだ。中村芝翫の「祇園守」は本来、二本の巻物が交差する図案なのだが、よく見ると本作の巻物はロウソクに変えられている。ロウソクは会津藩の名産品だから、ここでも佐島典寛が会津藩だとわかる。佐島典寛が威勢よく前方に飛ばしているのも、ロウソクを置く燭台である。

また「祇園守」の外側の円の部分も中村芝翫の定紋とは少し違う。会津藩用の「祇園守」は外周部分が幕府の講武所で使用されていた「鎖繫ぎ」に似せてあるのだ。残念ながら「鎖繫ぎ」は文献に幕府の武芸訓練所を表すものとして単語が出てくるのみで、古い絵が見つからずはっきりした形状は不明である。けれど、集団風刺画にも本図の「鎖繫ぎ」

と似たものが登場するから、だいたいこのような形だったのだろう。とはいえ、疑いを持って注視しないと紋の細かい違いは見逃してしまえばまずい。尊王攘夷派の目をごまかすために、役者が慎重に選ばれているのだ。

尊王攘夷派（新政府軍）は会津藩を「朝敵」などと呼び会津に攻め入ろうとしているが、それが濡れ衣であり、テロの取り締まりを受けたことに対する私的な復讐であることを江戸の庶民は知っていた。

右下に描いてある小さな赤い布のようなものは何だろうか？ 模様は菊にも似ているので、これは江戸へやって来た官軍（新政府軍）が、まさに「官軍」の目印として肩に付けていた「錦切れ（錦の御旗の切れ端をイメージした布。天皇の軍隊である証明）」に見立てたものだろう。戦争中の江戸では、道で官軍の兵から「錦切れ」をはぎ取るスリが現れ、五〇〜六〇枚も成功させて江戸っ子の喝采を浴びた。度胸のいいスリは最後に斬られてしまったが、このスリのように、会津藩にも官軍の「錦切れ」を大々的にはぎ取ってもらいたいという、江戸っ子の気持ちが描かれているのだろう。



中村芝翫
「祇園守」

こんな感じで全作読み解いていけば、「庶民目線の戊辰戦争」がどんなものだったかが分かります。

勝者目線でも敗者目線でもない庶民目線の幕末史は、時に現代人の想像を絶する解釈が登場します。

ただ、それが、「江戸の世論」だったことは事実なのです。

浮世絵は個人的な日記ではなく値段の付いた商品なので、版元はたくさん売るために買い手に気に入られる商品を出すのです。

ご興味ありましたら是非読んでみて下さい。よろしくお願いいたします。



「幕末暗号解説記 国周の風刺画「善悪鬼人鏡」が明らかにする「江戸の情報知」

6月14日発行。

(著者) 若林悠

(監修・解説) 中村彰彦

(歴史小説で幕末ものを多数手がけておられる直木賞作家の中村先生)

252ページ

風刺画44セットフルカラー

四六版

1980円

晶文社

